

こんにちは、

新しい講座「正教聖歌の伝統」を開講します。正教聖歌の豊かな伝統を知って、奉神礼を十二分に味わい、楽しみ、「こんなに素晴らしいんだよ」と自信を持って次の世代に渡すためのお手伝いができたら、と思います。正教聖歌、奉神礼、知れば知るほど面白いです。

講座は YouTube と Zoom の二本立てで行います。ひとつは、今日のような短いビデオ講義を月 1 回ぐらいのペースで YouTube に上げて、いつでも見て頂けるようにします。内容としては、正教聖歌伝統がどのようにできてきたかという奉神礼と聖歌発展の歴史をたどり、その中で、トロパリ、コンダク、ポロキメンなどといった正教会用語のお名前を解説し、もともとどんな使われかたをしていたのか、なぜそうなったかを時代背景とともにお話しします。また、ズナメニイ聖歌、ビザンティン聖歌など、近年ますます注目されている正教伝統の「単旋律聖歌」の魅力、音楽づくりの技を紹介し、正教音楽の特徴をつかみます。何回に 1 回かは Zoom によるオンライン講習会を行いたいと思いますので、ご希望の方は大阪ハリストス正教会までメールでご連絡下さい。ご案内を申し上げます。

さてさて、オンライン講習会もビデオ撮影も素人の手探り状態です。どうなることやら、不安もありますが、まずは始めてみようと思います。

正教聖歌の伝統 序章 Slide1 「昔ってどれくらい昔？」

「正教会は昔からの伝統を守っている」と、よく言われます。私たちは漠然と「昔から」と思っています。あるいは「昔からこうやってきた」と言われることもあります。しかし、「昔って、どれくらい昔」ですか。おじいさんおばあさんの世代？ 100 年？ 200 年？ 1000 年？

日本で、正教会の聖歌の伝統というと何をイメージされますか。革命前のロシア合唱聖歌でしょうか。実は、合唱聖歌が歌われるようになったのは 17 世紀ごろからで、それ以前は長い間、単旋律、ユニゾン、一つの声でした。ギリシアの伝統のビザンティン聖歌はイゾンという通奏低音がついていますが、今でも単旋律です。西方教会のグレゴリオ聖歌も昔はすべて単旋律でした。西方では 9 世紀、10 世紀頃から多声聖歌が始まり、器楽が導入され、正教とは異なる道を進みました。

ロシアでは 17 世紀ぐらいから政府主導で西方文化や合唱聖歌が導入されました。日本に正教がもたらされたのは 19 世紀、ロシアではしっかりと合唱聖歌が根付いていました。ニコライ大主教も聖歌といえばペテルブルグで聞いていた合唱聖歌のイメージを持っていたと思います。さらに時は、文明開化の明治時代、日本人から見ればロシアも西洋の一員、華やかな合唱聖歌は大いに歓迎



され、外からも賞賛され、日本人信徒も鼻が高かっただろう思います。

さて、お話を始める前に、ここで言う「単旋律聖歌」とは日本正教会で一般に言われる「単音聖歌」とは別物だということを確認しておきたいと思います。日本で「単音」と言われるものは、もともとシンプルな四声合唱聖歌として作られたものから、主にアルトのメロディを取り出して一声にしたものです。ですから、一つの声で歌うにはメロディが単調だったり、逆に取りにくい音があったりして、「面白くない」とか「難しい」とか言われて、敬遠され、四部合唱が本式、単音は間に合わせというような誤解もあり、何となく低く見られている気がします。

実はロシアで合唱聖歌を作るときに、もとのメロディは和声にあわせて歪められ、単純化され、パーツの数も減らされてしまっていました。では、合唱になる前の単旋律聖歌はどんなものだったのでしょうか。

もとの歌は、ことばを歌うことに力点があり、祈りの歌としても力があっただけでなく、音楽として見ても、美しいメロディがたくさんありました。そこに19世紀の作曲家たちは注目した、というわけです。

さて、ズナメニイとか古い旋律というと、あまり縁がないように思われるかもしれませんが、実はこれらの古いメロディには、みなさんも耳に馴染んでいるものがたくさんあります。

たとえばこれはどうですか。

降誕祭コンダク

ポルトニャンスキー作曲

ボタロフスキー 改譯
テイト加藤直四郎 編曲

いま 処女 は いま 処女 は えいざいの
は か せ は は か せ は ほ し に し た が つ て
主 を 生 む 主 を 生 む 地 は
た び す る た び す る け だ し わ れ 等 の
地 は 歌 せ が た き も の に ほ ら を 厭 ず
た め に え い じ ゅ の か み み どり ご と し て う ま れ た り
ほ ら を 厭 ず 天 の つ か い 天 の つ か い
み どり ご と し て 生 ま れ た り
ほ く 者 と と も に 厭 め う と 厭 め う

降誕祭のコンダク「今処女は」(♪)。ポルトニャンスキー作曲と書かれていますが、西ウクライ

ナ地方で歌われていたブルガリア調と呼ばれるメロディがもとになっています。ボルトニヤンスキーは合唱聖歌に編曲しました。もとのメロディはこんなのです。

Вондѣкъ, глѣсъ г.
 Бѣлѣгѣу рѣшѣна еадкопѣца (V в.).
 Бѣлѣгѣскагѣу рѣспѣва:

Дѣ — ва днѣсь пре — сѣ — ще — ствен на — го
 ра — ждѣ — стѣ, и зе — маѣ вер — тѣнѣ не — при
 стѣн — но — мѣ при — но — стѣ, днѣ — ге — ан
 ѣ па — стѣрь — ми гла — во — ло — блѣ, вѣдѣ,
 боа — сѣи же го свѣдѣ — ло — и — нѣ — шѣ.
 стѣн — стѣ: пѣсь во ра — днѣ ро — днѣ — еа — стѣ — ро.
 ча ма — до пре — вѣч — ный боги.

降誕祭コンダク3調
 聖歌者聖ロマン(5世紀)
 ブルガリア調



スプートニク・ブサルモシチカ
 発行1915年宗務院印刷局ベト
 ログラード
 再版1959年ジョーダンヴィル、
 アメリカ

次にパスタのスティヒラ「神は起き」です。これはズナメニイのスティヒラ 5 調そのものです。基本のメロディはこれで、ここにポペフキと呼ばれる飾りのセットが挿入されています。スモレンスキーの合唱アレンジをポクロフスキーが日本語に翻案したものが歌われています。(♪) Valaam Pascha

パスタのスティヒラ 5調

По стѣхнѣрахъ хвалѣтнѣхъ воискрѣснѣхъ, поѣмъ стѣхнѣры пѣхнѣ,
 глѣсъ ѿ.

ДА ВОС — КРЕС — НЕТЪ БОГЪ, И РАС — ЧТО — ЧАЧ — ЕА ВРА — ЗИ ѿ — ГѢ.
 ПА — СХА СВА — ЦѢН — НА — А НАМЪ ДНѢСЪ ПО — КА — ЗА — ЕА, ПА — СХА НО — ВА СВА — ТѢ — А:
 ПА — СХА ТѢ — ИИ — СТѢН — НА — А, ПА — СХА ВСЕ — ЧЕСТ — НА — А, ПА — СХА ХРІ — СТѢСЪ ИЗ — БА —
 ВИ — ТѢЛЬ: ПА — СХА НЕ — ПО — РОЧ — НА — А, ПА — СХА БЕ — ЛѢ — КА — А, ПА — СХА
 ВѢР — НЫХЪ: ПА — СХА ДВѢ — РИ РАЙ — СКѢ — А НАМЪ ѿ — ВЕР — ЗА — Ю — ЦИ — А, ПА — СХА
 ВѢР — НЫХЪ ѿ — СВА — ЦІА — Ю — ЦА — А ВѢР — НЫХЪ.

ほかに、みなさんよくご存知のリムスキー・コルサコフのヘルビムを見てみましょう。これも古いメロディがモチーフになっています。(♪)四角音符の楽譜には Slide:Ha Радуйся! と書いてありますので、『慶べよ』という歌のメロディを使ったという意味だと思いたしますが、詳しいことはわかりません。同じメロディを、他の作曲家もアレンジしています。コヴァレフスキー、ビリューコフ、ケドロフなどです。(♪)Piano で弾く

№ 79. На «Радуйся».

Перелож. В. БИРЮКОВА

№ 78.

Обход нотного пения 1909г. Мелодия №5. На «Радуйся».

Гармонизация М.Е. КОВАЛЕВСКОГО

№ 80.

Музыка Н.Н. КЕДРОВА-отца. 1939.

ラフマニノフの『晩禱』はその大半が古い単旋律のメロディをモチーフにしたのは有名ですね。どの伝統のメロディを使ったかはきちんと書いてあります。以前、「至高き」のメロディを借用して日本語にしたら、「作曲家の作品をこういう形に変えるのはどうかと思う」と言われたことがありますが、それは西洋近代の音楽の考え方で、正教会では古い伝統的なメロディを使い回すことはよく行われています。正教会聖歌では、誰その作曲と書かれていても、実際のところメロディはオリジナルでないことがほとんどです。正教会はアイコンもそうですが、基本はコピーです。そもそも教会で使うものはすべて神のもの、個人のオリジナリティとか著作権とかという考え方は正教にはもともとありませんでした。

今お見せした、四角音符の楽譜は18世紀頃から、失われつつある古い聖歌を記録保存するために、西洋の五線譜を参考に考案されたもので、キエフ譜とも呼ばれます。

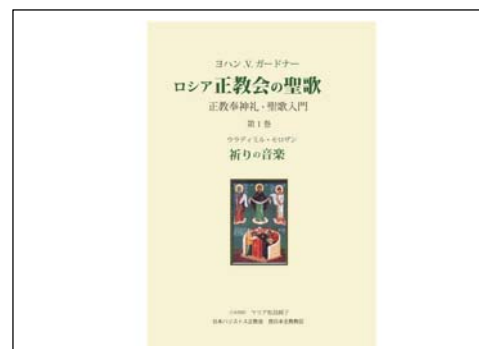
19世紀末から20世紀初め、多くの作曲家がこの四角音符の本を参考にして、古い聖歌のメロディをアレンジして合唱聖歌に作りました。だからロシア聖歌の魅力の源には古い伝統的な単旋律聖歌があると言えます。ここにご紹介した楽譜は大阪教会の図書コーナーで閲覧できます。



さて、こういう古い伝統に着目した作曲活動はロシア革命で封じ込められてしまいます。共産主義政府の下で70年間教会は弾圧されました。ロシア聖歌はロシア文化としては演奏を許されましたが、「祈りの歌」としての聖歌は不可でした。

この間、ズナメニイ聖歌の研究はロシアの外で欧米に亡命したロシア移民の作曲家によって進められました。たとえばこの本『ロシア正教会の聖歌』を書いたヨハン・フォン・ガードナー。西日本主教区から翻訳が出ています。

それから大阪教会のエカテリナ加藤都也子さんが師事したボリス・レトコフスキー。都也子さん自身もズナメニイの『聖にして福たる』をウラディミル神学校の卒業作品として作曲し、



優秀作品として CD や楽譜になっています。

レトコフスキー ワラーム聖歌

加藤都也子 ズナメニイ聖歌

80

O Gladsome Light 聖にして福たる

Znamenny Chant
arr. E. Kato



聖にして福たる

聖にして福たる
常生なる天の父の
聖なる光栄の輝かなる光
イイスス・ハリストスよ、
我等日の入りに至り、
暁の光を見て、
父と子と聖神^{*}を歌ふ。
生命を賜ふ神の子よ、
爾はいつも敬虔の聲にて歌わる
べし、故に世界は爾を業め讃む。

Свете Тихий святых Славы
Безсмертного Отца Небесного,
Святого Блаженного, Иисусе
Христе, пришедше на запад
солнца, видевше свет вечерний,
поем Отца, Сына и Святого Духа
Бога. Достойн еси во вся
времена лет быти гласы
преподобными, Сыне Божий,
живот дай, темже мир Тя
славят

さて、話をロシアに戻します。80年代から徐々に教会が返還されが復活すると、祈りの歌としての聖歌が見直され、単旋律聖歌への関心が、再び高まりました。ビザンティン・イコンが注目されたのと同じ動きです。90年代から2000年代にかけてズナメニイ聖歌の研究が進み、CDや楽譜が次々と出版されました。また17世紀ニコンの改革以後、迫害されてきた旧儀式派の聖歌も取り上げられるようになりました。

私がロシアに行った2006年、ズナメニイ聖歌の奉神礼に与ったのは、まず、北のアトスと呼ばれるワラーム修道院でした。朝4時から半地下の聖堂でズナメニイ聖歌のお祈りが行われていました。聖堂係が長い棒を持って、一本一本シャンデリアのロウソクを灯し、「主の名を讃め揚げよ」が歌われ、一気に至聖所の扉が開くと、光の洪水に巻き込まれるようでした。この録音は聖歌指揮者のダヴィード神父さまに頂いたものです。これも『聖にして福たる』です。

次に訪ねたのは聖セルギイ至聖三者修道院です。中でも一番古い聖堂、15世紀に建てられた至聖三者聖堂(写真)で行われていました。朝、5時頃、真っ暗な中でお祈りが始まり、聖セルギイの不朽体に接吻して聖体礼儀が始まるころ、東の窓か



ワラーム修道院



主の奥容大聖堂



聖セルギイ至聖三者修道院

至聖三者聖堂



ら光が差し込み、香炉の煙が立ち上ります。古い石造りの聖堂の単旋律聖歌は大地にひびきわたるようでした。ボイスレコーダーでこっそり録音したので雑音が入っています。『聖なる神』です。

ズナメニイ聖歌をさらに遡るとビザンティン聖歌にたどり着きます。ビザンティン聖歌は今でもギリシア教会だけでなく東ヨーロッパ、アラブ地方などで歌われて続けています。神のもとへズンズン進んでいくような力強さがあります。ロシアでも自分たちのルーツとしてのビザンティン聖歌が注目され、スラブ語でビザンティン聖歌を歌っているグループもあります。また総主教庁の出版局のなかにビザンティン聖歌の教室がありました。ラフマニノフの演奏家として知られるピアニスト、仙台教会の指揮者マトフェイ土田さんもモスクワ音楽院でラフマニノフを学ぶうちに正教会聖歌に触れ、ここでビザンティン聖歌を学ばれました。短いですが、教室の様子を撮影したビデオがあります。



ビザンティンから伝えられたビザンティン聖歌がロシアの地に根付いてズナメニイ聖歌が生まれました。私たちも日本の地に根付く自分たちの祈りの歌を探すという仕事が与えられています。それはニコライ大主教が強く願ったことでもあります。正教会の言う伝統とは過去のかたちを博物館の標本のようにして守ることはありません。伝統とは生きて成長するものです。時代や状況に合わせて、活きたものとして成長させることが必要です。それは子育てにも似て、大変ですが、楽しい仕事です。

その時大切なのは、正教会の奉神礼と聖歌の本質をしっかり押さえておくことです。西洋音楽の技術や知識は大いに役に立ちますが、正教との考え方の違いを押さえておかないと、間違った方向へ行ってしまう。

歴史を知ることで、教会が音楽に対してどういう態度を取ってきたのか、どんな背景でこの歌が作られ、どんな風に歌われたかを知ることで、どんな音楽が相応しいのか、どう歌えばいいのかが見えてきます。また古い聖歌や古い楽譜に親しむことから、正教伝統の音楽の作り方、「ことば」と「音楽」の緊密な関係を読み取ることができます。

私もまだまだ勉強中ですが、今まで、いろいろな場所で、いろいろな方から教えて頂いたこと、たくさんの資料があります。私が受けとった贈り物を、みなさんと分かち合っていきたいと思います。

今日はこれで終わります。

次回からはキリスト教の聖歌の始まりについてお話していこうと思います。